

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2017 冬号 **81**

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集 旧西村家住宅の保存修理 (2)



特集 「建造物 旧西村家住宅」の保存修理（2）

一、はじめに

新宮市の重要文化財・旧西村家住宅（西村記念館）では、昨夏から保存修理工事を続けています。前回の紹介時（本誌77号）は、まだ解体工事の途中でした。それから1年の間に、必要な解体を終え、基礎の修理と、柱・桁など軸組の補修を進めて来ました（写真1～15、表紙1～10）。

今回の修理は、地盤の一部分が沈んでしまったことで建物が変形し、屋根瓦のズレや壁面に亀裂が入るなどの破損が生じていたこと、その破損箇所からの雨漏りで軸組が腐朽したり、シロアリの被害も及ぶなどとして、構造が不安定になっていたこと、これらの不具合を解消して健全な状態に戻すことが目的です。



写真1 建物北東、基礎石の沈下および木部腐朽の様子



写真2 日本室、軸組解体中の様子



写真3 台所、軸組解体後の様子



写真4 地下室、配管経路の確認



写真5 地下室、基礎石解体の様子



写真6 基礎石下などで配管を確認



写真7 鉄筋コンクリート製の基礎を打設

保存修理では、これに加えて、文化財である建物がどう建てられ、その後どの様に改造や修理を受けて来たのか、などを解体工事の中で確認していきます。そうして明らかとなった建物の来歴を踏まえながら、今回の修理の内容を詰めていきました。

具体的には、修理前のすがたに直すのが良いか、完成した時のすがたに戻すのが適切か、などを国（文化庁）や和歌山県、そして所有者である新宮市とともに検討しました。その結果、大正10年代に行われた改修が当建物にとって意義あるものとされて、その姿（図2、3）を目指して復旧することになりました。

そこで今回は、修理前から伝えられていた当建物の特徴や魅力について、修理中に確

認された内容でよりわかり易くなつて来た部分を幾つか紹介しようと思います。

二、建物の特徴とその魅力

旧西村家住宅は、西村伊作氏（以下「伊作氏」）が大正4（1915）年に自ら設計と監督をした3度目の自邸で、最近では「和風モダン建築」などと称される、洋風住宅の一つです。建てられた当時は、住宅改良や生活改善などが盛んに提唱され始めた時期でした。その中でも伊作氏は、上流階級ではなく中流階級へ向けた住宅の供給にいち早く注力した方だった様です。

当建物を建てた4年後の大正8年に、伊作氏は『たのしき住家』（以下『住家』）という本を著します。その『住家』からも伊作氏の考えや思いを新たに見出すことができました。そうした部分も交えながら、特徴を順に紹介します（鈎括弧の箇所は『住家』からの引用などを表す）。

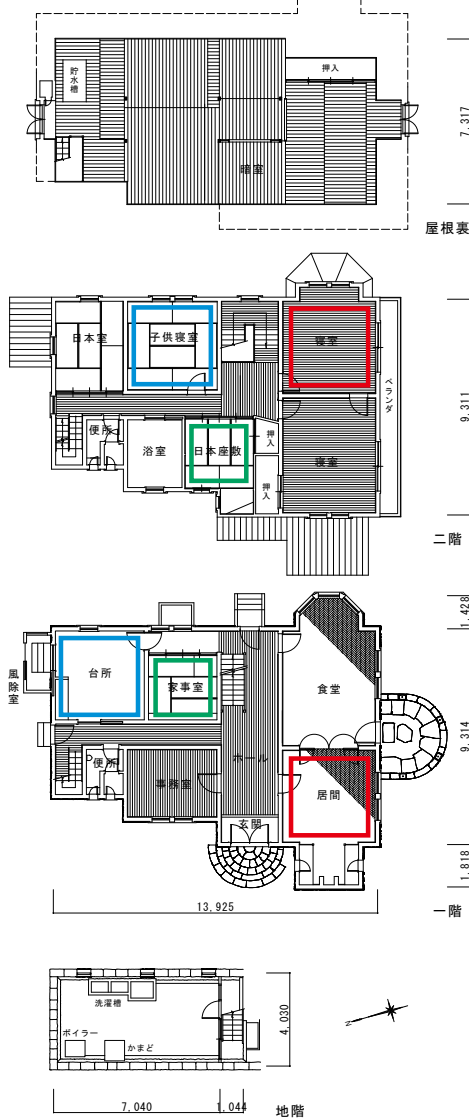


図1 修理前の主屋の各階平面図
(3種類の正方形を中心に構成する)

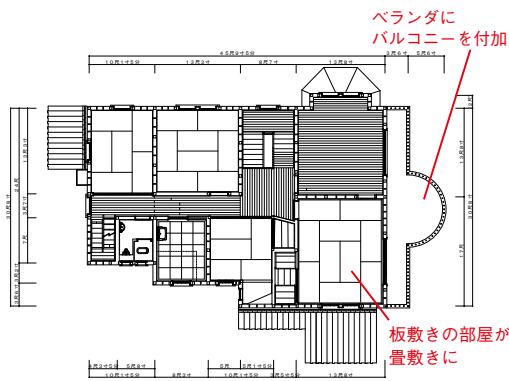


図2 大正10年代の2階平面図

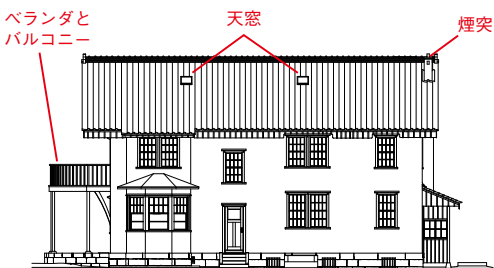


図3 大正10年代の東側立面図
(今回の修理で目指す姿となります)

①立地(地形を利用した計画)

地下室のある建物北東では、地盤の安定と構造の強化のために、石積みを解体しました。その途中、石積みの下に2度目の建物で使用したとみられる排水用の配管が確認されました(写真6)。

このことで、大正4年の建築では、敷地北側の伊佐田通りに向けて低くなっていった地形を利用して地下室を配置したことや、その



写真8 地下室、基礎石の積み直し



写真9 地下室、補強鉄骨の組立



写真10 地下室、モルタル床の復旧



写真11 基礎工事後の地下室内部



写真12 台所、モルタル床の復旧

②間取り(部屋の配置と大きさ)

まわりを盛り土して敷地を造成したことも新たにわかりました。

図1は、各階の間取りを示したものです。1階では居間や食堂、2階では寝室を南側に集め、廊下を挟んだ北側に1階は台所や家事室、事務室(山林業の事務を行った場所)を配します。2階には子供寝室など畳敷きの部屋が並びます。

大正10年代の改造では、2階南西の寝室を畳敷きとして子供部屋に変更しています(図2)。「住家」で「家族の増加に合わせて子供部屋を増やすことを想定して」設計した通りの結果でした。

伊作氏は「住家」で、住宅の3要素を「居間、台所、寝室」と述べて、多くの部屋を真四角にしています。それらの部屋は「従来の日本人の生活に合わせて」四畳半や八畳など畳の大きさを基準にします。家事室は「妻や女中(使用人)たちが裁縫などする」こと、子供部屋は「子供たちが遊ぶ際に安全な」ことを意識して畳を敷いています。(写真16、17)。そうして配した各室を廊下で繋いだ形が当建物です。

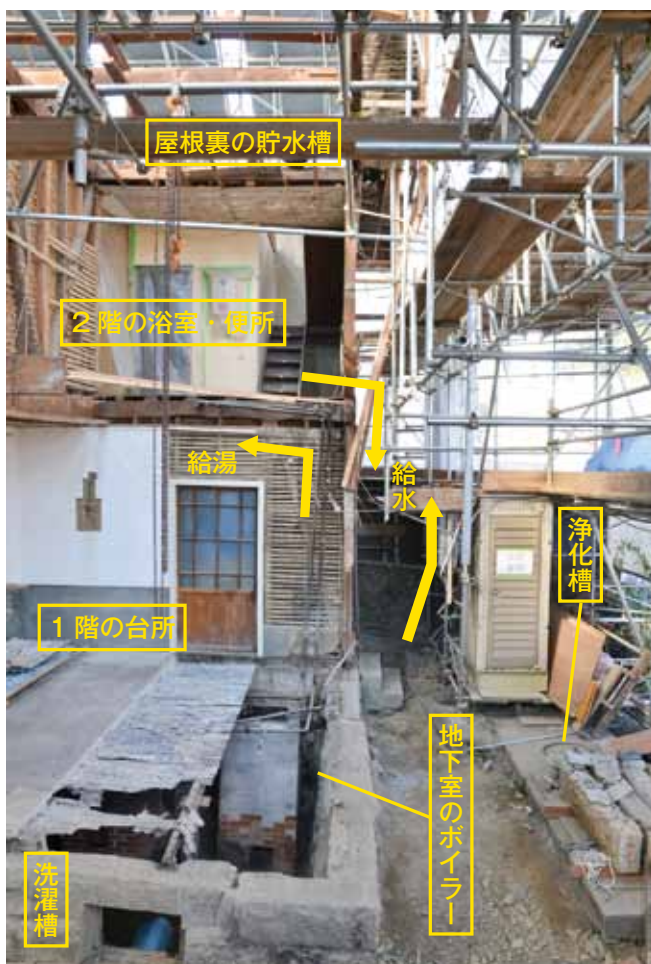


写真 13 建物北東の解体状況と設備類の配置
(地下水を屋根裏の貯水槽へ汲み上げ、地下室のボイラーに下ろして温めて、浴室や洗濯槽などへ給湯する仕組みとなっています。)

③ 給水・排水、給湯などの設備類

北東の台所の下にある地下室にはボイラー、その上方の屋根裏部分には貯水槽を据えます。貯水槽に地下水を手動ポンプで汲み上げ、台所や浴室、北西に集めた洗面室や便所へと給水しました。また、ボイラーで水を温めて、そのお湯を2階の浴室に送るなど、給湯機能も備えられています。お湯は、地下室内の洗濯槽にも送られました。便所は水洗式で、建物の北側に濾過式の浄化槽を設けています(写真13、図4)。

そのボイラーで発生した熱は、食堂や居間へ陶器製の配管を延ばし、床下から温風とし

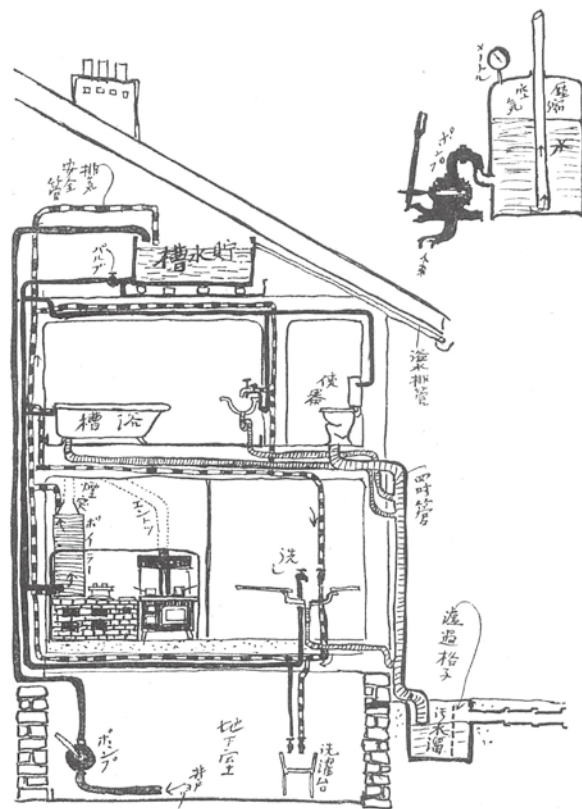


図 4 『楽しき住家』掲載の給排水・給湯などの仕組みを表した伊作氏のスケッチ

④ 内装(室内での工夫)

修理中に解体した内装の調査では、建築された当時、寝室の内壁はいずれも浅葱色(緑がかった薄めの藍色)であったことがわかりました(写真18)。この理由としては、「風邪などで日中に休む際にも気分がよろしい」ようにとある、カーテンとともに緑色にされたものと考えられます。

電気のスイッチは、大人が使う部屋と子供が使う部屋で高さを変えています。2階南西の寝室が子供部屋に変更された際に、子供寝室と同じ高さに下げられていたこともわかりました(表紙H・I)。

また、部屋の入口の扉にも伊作氏の工夫を

て噴き出させました。この温風はさらに、居間の西側に設けられた暖炉構えを経由して、その上の寝室まで導かれてありました(表紙下方の写真A〜Hにその経路を、裏表紙にはその解説を示しています)。

この点に関しては、「居間の一角に家族で囲らんする空間」や「ガス灯や暖炉の火のもと、今日一日の出来事を語り合う時間」が意識されています。ただ、『住家』掲載の居間の写真では暖炉構えの前にストローヴが置かれていることや、子供部屋の増設時には2階の温風噴出口が塞がれているなど、その効果は十分に発揮されなかった可能性も考えられます。



写真 14 日本室、軸組の組み直し



写真 15 垂木組み付けの様子



写真 16 修理前の家事室



写真 17 修理前の子供寝室



写真 18 寝室内の浅葱色の砂壁

表 1 紀南に残る伊作氏の関わった建造物

(大正年間分を抽出、太字は新宮市に所在)

建築物の名称	建築年	建築物の来歴等
旧・西村家住宅	大正 4 (1915)	T12頃改修、S39頃改修後「西村記念館」として公開開始、H28～保存修理工事中
新宮町公会堂	大正 5 (1916)	S41市民会館建造時に公会堂期の石垣を一部再用、H29解体
旧・新宮教会会堂	大正 9 (1920)	仲ノ町からの移築・改修に関与、S52解体
旧・新宮教会牧師館	大正 9 (1920)	S52会堂とともに解体
第一尋常小学校校門	大正 10 (1921)	戦後に旧・丹鶴小学校校門として移築、今後解体の可能性も
旧・大畑邸	大正 13 (1924)	熊野市井戸町、S38焼失
旧・桑原医院	大正 13 (1924)	下北山村、歴史民俗資料館として移築・改修されて現存
旧・高芝伝道教会	大正 14 (1925)	那智勝浦町下里、日本基督教団紀南教会として現存
旧・チャップマン邸	大正 15 (1926)	S29頃旅館施設として活用、S39頃改修、H27新宮市が購入、今後改修の予定
大石家墓	大正期?	南谷墓地内、区域石積に関与か

うかがえる部分がありました。扉には普通、開けた際に後ろ側の壁へ握り玉（ドアノブ）が当たらないよう、ストッパーなどが付きませんが、夫婦の寝室と子供たちの寝室にだけは存在しません。これも『住家』に「扉は90度だけ開けばよろしい」とあることから、家族が使用する部屋で扉の正しい開け閉めを子供たちに学ばせよう、という伊作氏の計らいの様にも感じられます。

⑤伊作氏がのこしたもの

ここまで述べて来た内容で共通するのは、家事をする女性や子供も含めて、その建物で暮らすすべての人への愛情や思いやりが表れていることです。

また、当建物の評価として謳われる、「電気やガス、上下水道などの設備を備え、家族重視の間取りを採用した先駆的な事例」ということの内側には、子供の成長を見守

り、かつ、学んでいける空間であってほしい、との伊作氏の思いが存在しているのです。

こうした思いは、大正11年に東京に設立した、文化学院のデザインにも繋がっていきます。小学校令施行規則で「建物の構造は平屋建てで堅牢であること」「壁は白くあること」とされた時代であっても、2階建てとし、庭や樹木との関わりを重視しました。室内への採光や通風を意識した設計も、当建物で実践した内容をそのまま扱った感じがあります。

当建物には他にもこうした伊作氏の意図が内包されているはずですが、工事が始まって1年半が経ち、その認識を強めてはいるのですが、当時の国民が関心を示したほどに理解する段階には達していない気もしています。それほど奥の深い建物と言えるでしょう。

三、おわりに

伊作氏が建築に関わったとされる建造物は、新宮市周辺に現在も幾つか残っています（表1）。新宮市では旧西村家住宅を含めて5件が確認されていますが、工事開始から1年半の間に、当市で実施中の地域再生事業によって3件に動きがありました。建築から1世紀が経ち、時代の流れの中で守られていくものと淘汰されていくもの、その行き先は様々でしょう。伊作氏がこの地においてのこされたものは、当建物とともに次世代へ受け継がれるよう、残りの工事に臨みたいと思います。

(下津健太郎)



川辺遺跡第2次発掘調査

川^{かわ}辺^{なべ}遺跡は、紀ノ川右岸の自然堤防並び

に和泉山脈から流れる雄ノ山川の扇状地、又はその末端に広がる縄文時代から中世の複合遺跡です。これまで一般国道24号和歌山バイパス等の工事に際し発掘調査が行われ、縄文時代の土器^{どき}棺^{かん}墓^ぼ、弥生時代から古墳時代の竪穴^{たてあな}建物^{たてもの}や前方^{しめう}後^{こう}方形^ぼの周溝^{しゅうこう}墓^ぼ、古代の掘立柱^{ほったて}建物^{たてもの}や道路状遺構、中世の掘



川辺遺跡並びに発掘調査位置図

立柱^{たて}建物^{たてもの}などが発見されています。今回の発掘調査は、和歌山県から委託を受けて、都市計画道路西脇山口線道路建設事業

に伴い実施しました。期間は、平成29年8月から12月までで、面積は約2,900㎡です。

調査の結果、古代から中世の水田や溝、弥生時代から古墳時代の溝、古墳時代の土器棺墓とみられる土壙^{どこう}を1基、弥生時代の周溝墓の一部又は区画溝とみられる溝を3条、その他土坑やピット、低湿地などが確認されました。

こうした調査成果により、今回の発掘調査地は、弥生時代以前には西側が低い地形で、その低地が低湿地状となり埋没したのち、弥生時代から古墳時代には当時の地形の傾斜に沿って、北東から南西又はそれに直行する方向に延びる溝が掘削されたものと



調査区全景（東から）



古墳時代の土器棺墓か（南から）

みられます。また、土壙などが確認されたことから、この時期に墓域としても利用された可能性があります。

古代から中世には東西方向に延びる溝が開削されたようで、溝の方向がそれまでのものと異なることから、新たに大規模な開発が行われたものと考えられます。こうした東西方向の溝は、古代の土地区画制度である条里制に基づく区割りを示す可能性があり注目されます。（金澤 舞）

文化財に関わる事業では、建造物修理や埋蔵文化財の発掘現場など、測量を行う機会が多々あります。測量は土地や建物の範囲、高低差などの正確な位置を現況図として描き残しておく目的から行います。ですから水平垂直をきちんと見て、正しい位置に器械を据え付けるところから始めることが必要です。今回は様々な方法の中から、建造物修理の現場で行ったものを紹介します。

現場で修理に取り掛かる前には、建物の基礎石等の調べたい場所に物差しの役割を果たす標尺を立て、望遠鏡に水準器が付いた専用の器械で数値を読み取ります。その数値の差を読みながら建物の沈下の大きさや、土地の傾斜を確認して建物を健全な状態に戻す計画を考えました。

問題を発見して正しい寸法を精査したら、「遣り方」という作業をして修理に取り掛かります。遣り方とは、図面に記された建築物の位置や基礎の天端高さ、部材の通り芯などの情報を、



遣り方の状況

現場で写すために木杭や板で作った仮設物です。部材の正確な位置を決める重要な作業ですから、水糸を張ったり、レーザー水準器を使って部材を配置したい位置からの距離を測り、計画通りの位置に施工が出来るのかを確認します。

再度、実際に作業をする職人さんにも確認していただき、検討を重ねながら、目指す姿に近づけていきます。

(大給友樹)

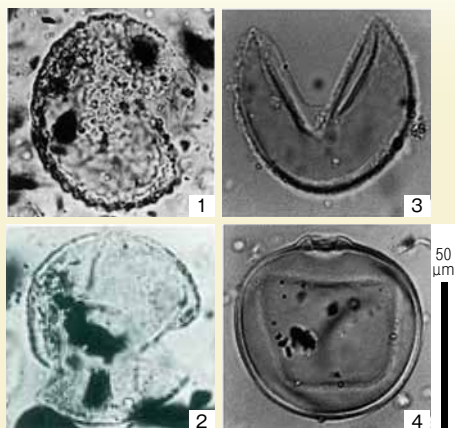
きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

花粉という言葉を聞けば、最近ではだれもが花粉症（花粉アレルギー）に悩まされることを頭に思い浮かべることになるでしょう。もちろん植物の受精に深くかわりのあるのはご存じのとおりです。この花粉は本来の役割を果たせなかったものが大部分で、それらは飛び散って地表や水中に落ち、長い歳月をかけて土砂に埋もれていきます。発掘調査で見られる堅穴建物や井戸、河川や沼などの大半のもは土砂に埋もれています。この埋もれた土砂には、土器などの遺物も入っていますが、そのほかにも様々なものが含まれています。肉眼で見えない化石となった花粉、胞子などがその一例です。

土砂の中から花粉や胞子の化石を取り出すのは容易なことではありませんが、土や鉱物質などの不純物を除去し、遠心分離機などを使って花粉、胞子の化石を取り出します。

取り出した花粉や胞子を光学顕微鏡で分析し、種類や数を集計して、採取地点の遺跡周辺にどのような植物が生えていたのかを明らかにし、その当時の植生環境を復元します。こういった分析作業は、専門の機関（会社）に委託します。



『西田井遺跡発掘調査報告書』1991年3月

1 コウヤマキ属、2 スギ属、
3 コナラ属コナラ亜属、4 イネ科

このように、普段あまり知られていない自然科学の分野の技術が考古学の研究にも取り入れられています。さらに、珪藻分析、植物珪酸体分析、種実同定、樹種同定などを総合的に行うことによって、より詳細な古環境の復元が可能になります。

(土井孝之)

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2017年冬～2018年春)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 冬期企画展 「うつわに隠された物語～装飾付須恵器の世界～」
2018年 1月20日(土)～ 3月4日(日)
- 春期企画展 「鏃と剣～弥生時代と古墳時代の戦い～」
2018年 3月24日(土)～ 5月13日(日)

和歌山県立博物館

- 企画展 「南葵音楽文庫 音楽の殿様・頼貞の楽譜コレクション」
2017年 12月3日(日)～ 1月21日(日)
- 企画展 「ふるさとからのおくりもの 新収蔵品展」
2018年 1月27日(土)～ 3月4日(日)
- 企画展 「きのくに 縁起絵巻の世界 — 開かれる秘密の物語 —」
2018年 3月10日(土)～ 4月15日(日)

和歌山市立博物館

- 企画展 「歴史を語る道具たち」
2018年 1月10日(水)～ 3月4日(日)

掲載内容は、変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙「旧西村家住宅の保存修理 (2)」
上段：1 小屋組の分解の様子、2 軸組の破損の状況、3 食堂の床板分解の様子、
4 内壁の解体の様子、5 地下室での地盤掘削の様子、6 鉄道レールを用いた地下室の天井、
7 地下室内の補強の様子、8 軸組の復旧作業の様子、9 軸組復旧後、10 小屋組復旧後
下段：①暖房設備のしくみ～地下室のボイラー (A) から食堂床下へ (C)、枝分かれして居間床下へ (D)、
さらに上方へ延びて (E～G) 2階南西の寝室に (H)、
②電気スイッチの高さ～大人用 (H) と子供用 (I) との比較
- 2 特集「建造物 旧西村家住宅の保存修理 (2)」
- 6 埋蔵文化財 短信「川辺遺跡第2次発掘調査」
- 7 きのくに歴史小話「建造物修理と測量」
「古環境を復元する微化石分析」
- 8 催し物案内



風車81 (2017・冬号)

平成29年12月28日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】 〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1
TEL 073-472-3710
FAX 073-474-2270
kanri-2@wabunse.or.jp